

生体反応としての精神現象と事実の関係について

永山 智一 (Tomokazu Nagayama)

所属 埼玉工業大学非常勤

人が自らを見定める生物としての自身の反応現象を認め、さらにその一般的事実としての提示、解釈を与えるに及んで、環境変化に内在する生命体をその起源とした認識可能性を有する対象あるいは現象としての精神、精神現象、こころあるいはそれらと身体との作用などの様々な疑似対象が創出された。生み出された経緯およびその使用や解釈には多様な違いがあれども、これらの言葉は今なお個体生命の内部機構あるいは内部作用を表現する人の共有指標としての役割を担っている。

人類史において実現されてきた他者あるいは自身の振る舞いを描写する妥当性、正確性の低い生命生物現象、動作、活動としてのそれらの表現やその周辺環境変化を含めた状況説明としての仮説の多くは、可能であれば自ら感知可能な生命体としての自身の反応現象や生物としての身体内部環境変化を観察対象とする事由の描写に取って代われ、表面的な生物の行動観察に基づく推測としての全体解釈だけではなく、現代的な分子規模での様々な生命現象の詳細表現が今この瞬間にも刻々と更新され続けている。ダーウィンを例とするならば、具体的な生物の進化の変遷を物質的環境における生命体の直接的な身体構成器官の変化に基づいて説明する事などがそれに当たる。そしてこの例に関わらず、哲学あるいは人文学が目的とするものの一部は、その歴史として常にこのような人の内的環境を明らかにすることおよびその派生事実としての巨視的な社会現象などの明確な認識獲得を目的として、上記の史実と軌を一にしながらその内容を更新し続けていると言える。

しかしながら生物の体内環境を表現するに当たっては、生き永らえていることが生命の省くことのできない要因であるがゆえに、それらが常に変化し確定現象あるいは事実表現としての明確化を確保することさえ困難な対象、現象であることは認められものの、個々の事象観測による事実認識の細部の移り変わりにもかかわらず、そこに人工的な推測としての精神やこころといった全体を総括可能な事実設定をそのまま言葉として使用し続け、人という集団生物間で用いられる共通理念としての役割が与え続けられている。時を経るごとに局所的ではあるが環境変化を記述し確実に積み重なってゆくそれらの観測的事実と、生きているか死んでいるかという人には明確に思える二者択一の生命現象の素朴な判定可能性の間にある、自身の直接的な経験としてもたらされる認識、理由付けの断絶が、不完全ながらも生命の内的環境全体を言い表すこれらの言葉を用いる必要性を今なお生み出し続けていると言える。

本発表では、過去のいくつかの哲学的思想を表現する文言に対して、その文章から読み取ることのできる表現者の生理現象としての欲求という推測的な事実を置換、対応させることで、主張の内容はともかく当の表現者に生じていたであろう精神現象としての事実関係を書き直してみるという試みを行う。例としてデカルトにおける「我思う、

故に我在り」という文章では

「我思う、」 — 「思う」と表現する、自身の生体としての反応現象の存在を表現している。この思うと表現された現象は確定的な共通理念としての意味を有していると考えている、あるいはそうであることを望んでいる。

「故に」 — その自身の現象から、高い必然性を持って生じる推論結果があると予測している、あるいはそのような事実があることを望んでいる。

「我在り」 — 我と呼ぶもの、そしてそれが存在するという事実が成り立つことを望んでいる。我および存在という認識対象が確定的であることを明言している、あるいはそうであることを望んでいる。

のように、言葉や文章の内容を自身で解釈することを一先ず度外視して、表現者の表現欲求の存在を逐次抜き出してみる。

これにより、古代のギリシャや様々な宗教で語られる自然史としての人という生物の欲求という現象が、人のもたらす多くの行動の源となっていた吟味の中心的対象であったことへ回帰が思い出される。この例のような欲求解析の実例を述べるつもりである。